令和２年度・令和３年度　　長崎県教育委員会公募制研究指定
令和元年度・令和２年度・令和３年度　島原市教育委員会指定

研究内容及び成果と課題

島原市立第二中学校

Ⅰ　研究構想図

学校教育目標

志を立て　すすんで学ぶ生徒の育成

研究主題

基礎・基本を身につけ、学んだことを活用できる生徒の育成

～読解力の視点を踏まえた授業改善を通して～

研究仮説

学習における基礎的・基本的な学習内容の定着を図る取組と並行して、読解力の視点を踏まえて授業改善を進めることにより、生徒の学習内容の理解がより深まり、学んだことを活用できる力が身につくであろう。

研究組織

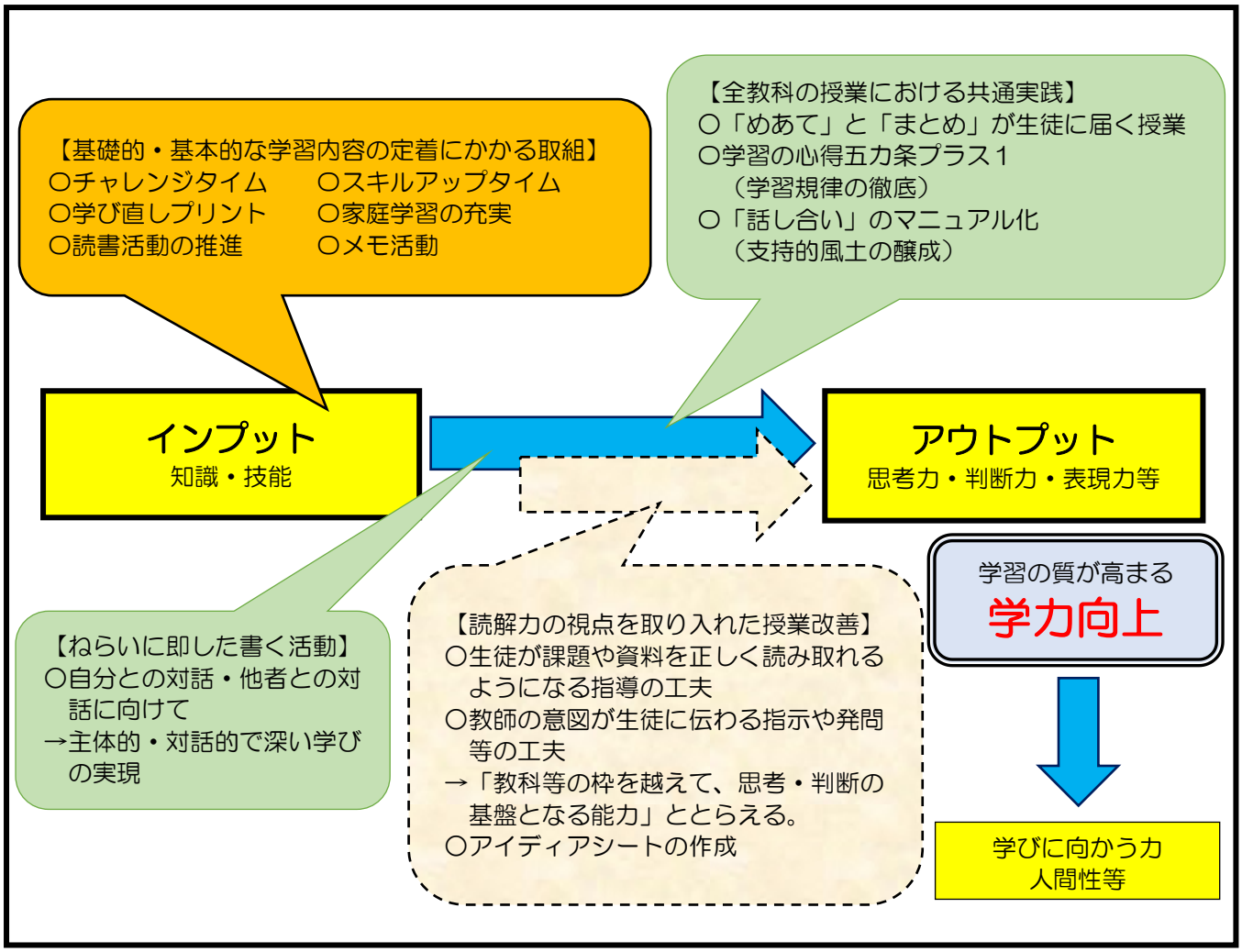
授業改善部	学習環境部	調査分析部
学習規律の徹底・支持的風土の醸成とともに、学習課題の解決に向けて、読解力の６つの問題分野を取り入れた授業改善を図る。	生徒の学び直しができる環境、自主的に学習に取り組める環境を整え、基礎的・基本的な学習内容の定着を図る。	教師の取組や生徒の学習状況を把握するためにアンケートを実施し、その結果・分析をもとに取組のさらなる充実を図る。

研究推進委員会　　教科部会・授業研究グループ

生徒の実態

本校の生徒は、学力調査の結果から基礎的・基本的な学習内容の理解が不十分であった。その中で特に課題だったのは、記述問題の無解答率が非常に高いことであった。そこで、基礎的・基本的な学習内容の定着を図るとともに、「ねらいに即して書く活動」をテーマに授業改善を進めた。しかし、無解答率の割合は減少したものの、思ったほど正答率の向上に結びつかなかったため、さらに学力調査の結果の分析を進めたところ、生徒の「問題文を正しく読み取る力」、依然として「ねらいに即して書く力」が不足していることが明らかになった。

Ⅱ　学力向上に向かう研究のイメージ



Ⅲ　読解力の６つの問題分野を取り入れた授業改善

係り受け解析（ルール）	◇文の基本構造（主語・述語・目的語）などを把握する力 例　「この文の主語がわかる？」
照応解決（みつける） ◆全教科で共通実践	◇指示代名詞が指すものや、省略された主語や目的語を把握する力 例　「この文の「それ」が指すものがわかる？」
同義文判定（たしかめる） ▲本校の課題	◇２文の意味が同一であるかどうかを正しく判定する力 例　「この２つの文の意味は同じか、違うか判断できる？」
推論（むすびつける） ▲本校の課題	◇既存の知識と新しく得られた知識から、論理的に判断する力 例　「学んだことをもとに、理由をつけて予想できる？」
イメージ同定（つなげる）	◇文章を図やグラフと比べ、内容が一致しているかどうかを認識する力 例　「このグラフを表す文はどれかわかる？」
具体例同定（へんかんする） ▲本校の課題	◇言葉の定義を読んで、それと合致する具体例を認識する力 例　「定義の意味を理解して、数と言葉で説明できる？」

Ⅳ　授業改善部の取組

１　ねらい

学習規律の徹底・支持的風土の醸成とともに、学習課題の解決に向けて、読解力の６つの問題分野を取り入れた授業改善を図る。

２　内　容

（１）読解力の視点を取り入れた授業改善

月末に翌月のカリキュラムを確認し、読解力の６つの問題分野を意識した授業改善プランを練るアイディアシートを作成した。　→　自分の授業を見つめることを目指して。

実施済み（令和　２ 年 １１ 月 ２０ 日）　／　実践アイディアのため未実施

学年・教科	1年・理科	単元名	身近な物理現象 音の性質
①-1 本時の「めあて」	音の大きさや高さは、何によって変わるかを調べる。		
①-2 本時の「まとめ」 （ゴールイメージ）	○音の大きさは弦の振れ幅によって変わる。 ○音の高さは、弦の振動の速さによって変わる。		
② ねらいに即した 「書く活動」	音の大小や高低の違いを、弦の振動の様子に着目して観察し、言葉や図で表現する。		
③ RS(読解力)を高める ための指導の工夫	係り受け解析　照応解決　同義文判定　推論　イメージ同定　具体例同定 ○「弦の振動」をキーワードにしてまとめさせる。 ○振動のようすを図で表現させ、イメージをつかませる。		
○成果	キーワードを示すことで表現が絞られまとめやすい。		
△課題	条件制御を意識した上で現象を捉え、まとめることができていない生徒がいた。		

授業実施の前の月末までに
学年・教科、単元名、①～③を記入
授業実施後
授業の成果と課題を記入

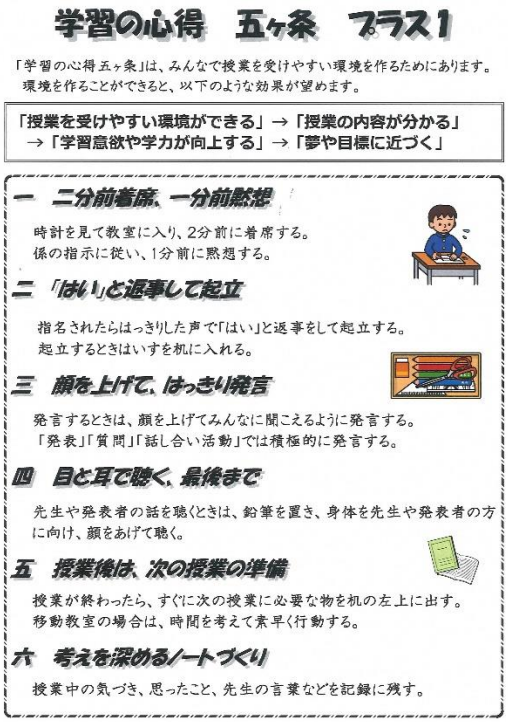
教師自身がめあてとまとめを明確に

書く活動をどの場面に取り入れるか

意識する読解力は何か

どのように読解力を高めるか

授業の成果と課題は何か



学習の心得　五ヶ条　プラス１

「学習の心得五ヶ条」は、みんなで授業を受けやすい環境を作るためにあります。
環境を作ることができると、以下のような効果が望めます。

「授業を受けやすい環境ができる」→「授業の内容が分かる」
→「学習意欲や学力が向上する」→「夢や目標に近づく」

一　二分前着席、一分前黙想
時計を見て教室に入り、2分前に着席する。
係の指示に従い、1分前に黙想する。

二　「はい」と返事して起立
指名されたらはっきりした声で「はい」と返事をして起立する。
起立するときはいすを机に入れる。

三　顔を上げて、はっきり発言
発言するときは、顔を上げてみんなに聞こえるように発言する。
「発表」「質問」「話し合い活動」では積極的に発言する。

四　目と耳で聴く、最後まで
先生や発表者の話を聴くときは、鉛筆を置き、身体を先生や発表者の方に向け、顔をあげて聴く。

五　授業後は、次の授業の準備
授業が終わったら、すぐに次の授業に必要な物を机の左上に出す。
移動教室の場合は、時間を考えて素早く行動する。

六　考えを深めるノートづくり
授業中の気づき、思ったこと、先生の言葉などを記録に残す。

（２）全教科での授業における共通実践

①「めあて」と「まとめ」が生徒に届く授業

教室に準備されている「めあて」と「まとめ」カードを使用して明示した。

→　学習の見通しを持たせるために。わかったこと・できるようになったことを確認するために。

②ねらいに即した書く活動

「理由や根拠を明らかにして書く」などの活動を通して、自分の考えや思いをまとめる（自分との対話）。その後、まとめた内容をもとに、対話活動（他者との対話）につなげる。

→　書く力の向上を目指して。

③学習の心得五ヶ条プラス１

学習規律の徹底を図るために学習の心得五ヶ条を設定した。令和３年度から項目を一つ増やし、教師の説明や他者の意見、活動中の気づきを書き込む欄をノートに設けた。

→　聞き取る力、考える力の向上を目指して。

だれもが発表しやすいように

☆発表・発言をするとき

① 発表・発言をするときは手を挙げる。指名されたら「はい」と返事をして、起立して発言する。
② 基本話型に沿って発表する。
③ 聴き取りやすい声で、語尾まではっきりと発言する。

	基本話型（話し方）
発表者	「〇〇です。（だと思います。）理由は〇〇だからです。みなさんどうですか。」
ほかの人	【同じ】「同じです。」「ぼく（わたし）も同じで〇〇だと思います。」
	【わかった、なっとくした】「わかりました。」
	【ちがう】「ぼく（わたし）は〇〇です。（だと思います。）理由は〇〇だからです。みなさんどうですか。」
	【わからない・聞き取れない】「もう一度説明をお願いします。」
	【つけ加え】「〇〇くん（さん）の意見につけ加えます。理由は〇〇だからです。みなさんどうですか。」

※あくまでも「基本話型」です。基本話型の話し方ができるようになったら、「根拠をつけ加える」、「比べる」など、効果的な発表・発言ができるように工夫してみよう。

☆発表・発言を聴くとき

① 発表・発言をする人に身体を向けて聴く。
② 基本話型に沿って反応する。
③ 内容を確認しながら聴く。（大切なことはメモを取る）
④ 自分の意見や考えと比べながら聴く。

活発な話し合いにするために

ステップ1　自分の考えを書いてまとめる

自分の考えをもつことが大切です。なぜそう考えたのか、理由も言えるように書いてまとめておこう。

ステップ2　意見を整理する

☆班長が司会をする。（基本話型を参考に）
司会：「…について話し合いをします。」
「意見を発表してください。〇〇くん（さん）。」
発1：「ぼく（わたし）は〇〇だと思います。
理由は…だからです。」（次の人に回していく）

※意見を「似たようなもの」「違うもの」など整理します。そうすることで話し合いの方向性が決まり、結論が出やすくなります。

④「話し合い」のマニュアル化

対話活動におけるマニュアルを作成した。そのマニュアルをラミネートして全校生徒に配付した。

→　表現力の向上、理解の深まり、他者の意見を受け入れる支持的風土の醸成を目指して。

（３）視点を共有した授業づくり

①授業づくりで共有する視点

〇生徒がめあてを理解できているか。
〇まとめが適切に行われているか。
〇めあてとまとめが正しく結びついているか。
〇指示や発問はわかりやすく適切か。
〇資料やワークシート、板書は適切か。
〇読解力の６つの問題分野は、めあて達成に向けた指導の手立てとして活用されているか。
〇書く活動の設定とその指導・支援は適切か。

→　各教科で専門的に必要とされる指導技術に視点を置くのではなく、めあての達成に向けた授業の構成に視点を置くことを確認（教科の枠組み・教科の壁にとらわれない）。

②指導案検討会・研究授業・授業研究会

教師が少人数のグループに分かれて、授業者の指導案検討会を実施し、研究授業を行った。授業研究会は学年部会の単位で、ＫＪ法を用いて気づきを発表した。

→　視点を共有した授業づくりを進めることで、一人一人が積極的に意見交換を行い、自己の授業力の向上につなげる。

３　成果と課題

〇授業全体を見通した指導計画の立案により、生徒は指示・発問・資料等を理解して書き、発表する活動を通して読解力・思考力・判断力・表現力を高めることができた（Ｐ６アンケート項目６）。
△学習内容の理解を深めるために、課題や指示の理解が不十分な生徒、書くことが苦手な生徒、話すことが苦手な生徒に対するさらなる手立ての工夫が必要である。

Ⅴ　学習環境部の取組

１　ねらい

生徒の学び直しができる環境、自主的に学習に取り組める環境を整え、基礎的・基本的な学習内容の定着を図る。

２　内　容

（１）チャレンジタイム・スキルアップタイム

チャレンジタイムは、国語・社会・数学・理科・英語の５教科で、漢字や計算、重要語句といった基礎的・基本的な内容の定着を目的に行っている全校一斉テストである。スキルアップタイムは、国語・数学・英語の３教科で、読解力向上を目的に行っている学習時間である。

→　行事予定作成での適切な配置と日課（Ａ・Ｂ・Ｃ）の工夫により、生徒の負担過重にならないよう配慮。

（２）学び直しプリント・学習カード

学習習慣の定着を目的に、本市が取り入れている東京書籍 Web ライブラリの学習プリントを学習スペースに用意した。加えて、５教科の学習カードも用意し、生徒が自分に合った課題を選び、家庭学習等で取り組んでいる。

→　特に「家庭学習の仕方がわからない」、「何から取り組めばよいのかわからない」といった生徒が学習に取り組めるきっかけづくりに。

（３）家庭学習の充実

家庭学習では、各教科からの課題と自主学習ノートの提出を行わせている。自主学習の取組については、生徒会が自主的に呼びかけを行うとともに、充実した取組をしている生徒のノートをコピーして掲示している。

→　学力向上の成果とともに、生徒自身に「自主的に学習に取り組む意識」の芽生え。そのことが生徒の「自治的な意識」の高まりへ。

（４）読書活動の推進

学校司書や図書ボランティアと連携し、読書活動の充実を進めた。朝の読み聞かせ、図書館まつり等の時季に応じたイベントを実施している（下記は実績。生徒数はほぼ増減なし）。

平成３０年度　貸出冊数３，５４７冊（１人平均１９冊）
　　来館者数７，４９７人
令和　２　年度　貸出冊数６，７５２冊（１人平均３５冊）
　　来館者数９，２１８人

３　成果と課題

〇チャレンジタイムの正答率から、基礎的・基本的な学習内容の定着が図られているといえる。また、学び直しプリントや学習カードを利用することで、家庭学習に取り組める生徒が増えた。

△学力が高い生徒にとって、チャレンジタイムや学び直しプリント等の内容は容易であり、すべての生徒に応じた学習支援の手立てになっているとはいえない。また、家庭学習に取り組める生徒が増えたものの、学習時間が短い生徒が多い（Ｐ６アンケート項目５）。

Ⅵ　調査分析部の取組

１　ねらい

教師の取組や生徒の学習状況を把握するためにアンケートを実施し、その結果・分析をもとに取組のさらなる充実を図る。

２　内　容

アンケートは、全国学力・学習状況調査の質問紙をもとに本校の取組に関わる内容を加えて作成した。実施時期・回数については令和２年度より年間３回（各学期末）に行った。

・項目２　「書くこと」の学習活動について　より（令和３年度１学期）

２－③感想文や説明文を書くことは難しいと思いますか。（%）

	全然思わない	ほとんど思わない	少し思う	かなり思う
３年	１４	８	**４７**	３１

・項目３　「学習の心得　五カ条プラス１」について　より（令和３年度１学期）

３－④先生が話しているとき、最後まで目と耳で聴くことができましたか。（%）

	できた	だいたいできた	あまりできなかった	ぜんぜんできなかった
１年	３４	５３	１０	３
２年	３３	５６	１０	１
３年	４９	４２	７	２

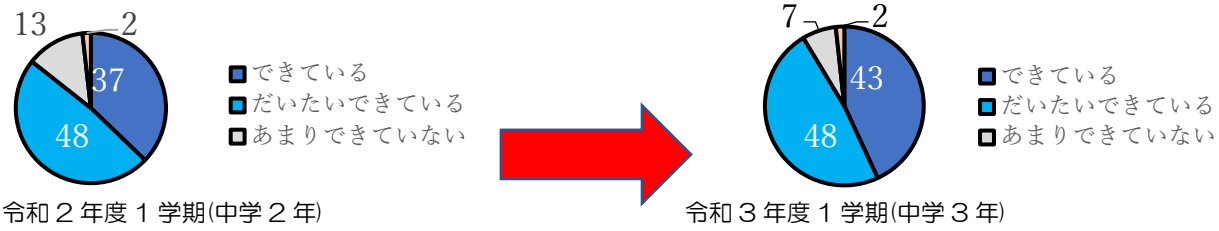
・項目５　基礎学力定着活動の充実について　より（令和３年度１学期）

５－①学校の授業時間以外に平日１日あたりどれくらいの時間勉強しますか。（塾も含む）（%）

	１時間未満	１時間～２時間	２時間～３時間	３時間～４時間	４時間以上
１年	２０	**６８**	１０	１	１
２年	１９	**６３**	１１	７	０
３年	２７	**５２**	１４	７	０

・項目６『読解力について』より（同一学年の比較）

６－⑤授業では、先生から示される課題や指示の内容を理解できていますか。（%）



令和２年度１学期(中学２年)　　令和３年度１学期(中学３年)

３　成果と課題

〇生徒の学習に対する意識や取組のよりよい変容が見られた。学年が上がるほど学習に対する意識が高く、取組や学習規律も「きちんとできている」と回答した生徒の割合が多かった。

△家庭学習の時間が少ないため、家庭と連携した指導が必要である。また、感想文や説明文を書くことに苦手意識を持つ生徒がまだ多いため、苦手意識を克服できるような手立てが必要である。

Ⅶ　研究を振り返って（第３学年の学力調査結果から）

表中の「市」は、本市が年２回（４月・１月）実施する目標準拠評価方式標準学力調査（東京書籍）。
赤　は県平均・全国平均を上回ったもの。オレンジは１年次から好ましい変容が見られた観点。

１　国　語

（１）学力調査結果の推移

調査	中１市（４月）	中１市（１月）	中２県（９月）	中２市（１月）	中３全（５月）
全国・県との差	全　-5.6	全　-3.6	県　-1.1	全　-4.5	全　+1.8

（２）観点の推移（話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと、伝統的な言語文化）

観点	話すこと・聞くこと					伝統的な言語文化				
学力調査	中１市（４月）	中１市（１月）	中２県（９月）	中２市（１月）	中３全（５月）	中１市（４月）	中１市（１月）	中２県（９月）	中２市（１月）	中３全（５月）
全国・県との差	全 -1.6	全 -0.2	県 +0.4	全 -6.1	全 +2.9	全 -5.1	全 -3.9	県 -3.8	全 -7.3	全 -2.3

観点	書くこと					読むこと				
学力調査	中１市（４月）	中１市（１月）	中２県（９月）	中２市（１月）	中３全（５月）	中１市（４月）	中１市（１月）	中２県（９月）	中２市（１月）	中３全（５月）
全国・県との差	全 -8.2	全 -2.9	県 -2.3	全 +9.1	全 +4.2	全 +1.7	全 -5.7	県 +1.9	全 -7.0	全 -1.2

２　数　学

（１）学力調査結果の推移

調査	中１市（４月）	中１市（１月）	中２県（９月）	中２市（１月）	中３全（５月）
全国・県との差	全　-2.6	全　-1.4	県　+4.5	全　-1.8	全　+1.8

（２）観点の推移（数と式・計算、図形、量と測定、関数、数量関係）

観点	数と式・計算					図形				
学力調査	中１市（４月）	中１市（１月）	中２県（９月）	中２市（１月）	中３全（５月）	中１市（４月）	中１市（１月）	中２県（９月）	中２市（１月）	中3全（５月）
全国・県との差	全 -3.4	全 -1.1	県 +4.9	全 +3.1	全 +0.1	全 -1.4	全 +3.4	県 +5.9	全 -7.2	全 +2.6

観点	量と測定		関数			数量関係		資料の活用
学力調査	中１市（４月）	中２県（９月）	中１市（１月）	中２市（１月）	中３全（５月）	中１市（４月）	中１市（１月）	中３全（５月）
全国・県との差	全 -0.5	県 +6.8	全 -4.1	全 -4.7	全 +9.1	全 -3.4	全 +0.5	全 -3.4

〈成　果〉
○基礎的・基本的な学習内容の定着を通して、生徒に得意分野を身につけさせることで、学びに向かう力が高まった。このことは、生徒の学習に対する取組に好ましい影響を及ぼした。
○ねらいに即した書く活動の充実により、自分の考えをまとめることができるようになった。
○読解力の向上を図ることで、問題を正確に読み取ることや資料から情報を取り出すことができるようになった。
→　これらの相乗効果で、問題に対する正しい解答ができるようになった（学力向上の達成）。

〈課　題〉
△問題や資料が長文になるほど、読解の正確さに欠ける。加えて、無解答率も高くなることから読解の速さもまだ不十分であるといえる。
△生徒が「知識・技能の習得（インプット）」と「思考力・判断力・表現力の習得（アウトプット）」、それらを結びつける「読解力の習得」のどこにつまづきがあるのかの把握が不十分。
→　個に応じた指導、家庭と成果を共有し連携を強化する必要がある（学習サイクルの確立）。